



あけぼの

第42号 2016. 3. 1
宇和特別支援学校
(知的障害部門)
図書館発行

「読書ノートのススメ」

校長 中村 徹男

「1年間に50冊。毎年立てる私の読書目標です。」



恥ずかしながら、まだ一度も達成したことはありませんが、それでも、読みたい本は大体2、3冊買い置きをしていて、読む本が手元に無くなると落ち着かなくなります。

どちらかというと乱読にあたる私の読書ですから、ストーリーや登場人物のことなど時間がたつと思いつくことが多いのですが、せっかくなにかわいさな本なのに、覚えていないのもかわいそうなので、読書ノートをつけることにしました。本の題名、作者、読み終えた日、そして心に残った文など、その時にあった身近な出来事と合わせて書くようにしています。

そのノートを開いてふり返ってみると、心を穏やかにしてくれたり、自分を奮い立たせてくれたりする言葉があります。いつの間にか大切な財産に

なっています。その中からいくつかを紹介してみよう。
「迷うときに何を物差しにして決断するかといえば、それは他人に対する愛情である。」
「努力した分、きっちり結果が出るわけじゃない。だけど、努力しなかったら、全く結果は出ない。」
「自分で考えてつかんだもの。自分で体験して学んだもの。それ以外は、現場では役に立たない。」

「言葉は往々にして、発信した方ではなくて、受信した方の感受性に意味の全てが委ねられている。」
「立派で正しい人になれないなら、間違っただけのめされる自分でいるしかない。少なくとも、何も感じなくなるよりは、間違っただけのめされる自分でいたい。」

「自分には関係ない、と目をそむければすむ誰かや何かのために、私は、これまでになにをしたことがあるだろうか。」

良き本に出会えることは、良き生き方につながると思っております。



多読賞

本校では図書室の本を、中・高校生は50冊、小学生は20冊以上読んだ児童・生徒を多読者として表彰しています。今年度は、6名の児童・生徒が表彰されました。本は心の栄養です。

たくさん本に出会って欲しいと思います。

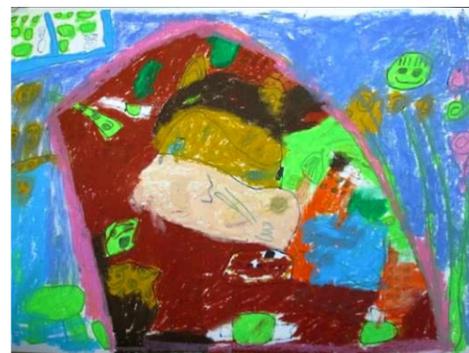


中学部1年B組 織田 倖成 20冊	中学部1年C組 菅野 勝斗 22冊	小学部4年星組 宇都宮 虎鉄 20冊
高等部3年G組 長谷川 恵未 64冊	高等部2年B組 井上 正喜 74冊	中学部2年B組 三瀬 絢子 20冊

読書感想画作品展



「おまののちるち」 中三年A組 織田 椋智



「おまののちるち」 中三年A組 大竹 郁光



「うらしまたろう」 小六年星組 水田 智也



「三びきのやぎのらがらふ」 小一年月組 大井 勝太

「おまののちるち」 中三年A組 岡村 明日美



「おまののちるち」 中三年A組 後藤 龍斗



「おまののちるち」 中三年A組 石田 陸



「うらしまたろう」 小四年星組 宇都宮 虎鉄



「三びきのやぎのらがらふ」 小一年月組 矢野 健太





読書感想文(高等部)



ぼくは「ありがとう、先生！」の本を読んで、お気に入りの言葉が二つあります。

一つ目は、「人生は思い出づくり」という言葉です。ぼくは、もっと人生を楽しんで思い出をたくさん作りたかったからです。

二つ目は、「笑顔のないところに、幸せは来ない」という言葉です。ぼくは、あまり顔が笑顔ではありません。その顔を笑顔にして、幸せを増やしていきたいと思ったからです。

三つ目は、「自分を救えるのは、自分だけ」という言葉です。ぼくは、自分を大切にしています。だから、自分を大切にしないで、災害や事故が起きた時には、自分の命は自分で守れるようにしたいと思ったからです。

この三つが、ぼくのお気に入りの言葉です。これからの三つの言葉を生かしながら、生活を送っていききたいと思っています。



『野口英世』

高等部一年 宮川 直輝

僕は、『野口英世』という本を読みました。野口英世という人は、千円札にもなっていて、どんな人か知りたかったのでこの本を選びました。

野口英世は生まれてすぐに左手にやけどをして、そのせいでいじめを受けてきました。しかしそんなじめに負けずにお母さんを薬にしてあげたいという気持ちで、勉強をとてもがんばってきました。そのおかげでいい学校に行き、アメリカで研究をすることにになりました。そして黄熱病という大変な病気について研究しているときに、自分が黄熱病にかかってしまい、亡くなってしまいました。

この野口英世という人は、自分のことより人のために何かをすることができずばらしい人だと思いました。また日本の医りよう技術が世界が目にするほど発展しているのも、野口英世のおかげではないかと僕は思います。

人の役に立つということは、難しいと思うけど、僕も将来人のために何かできる人になりたいです。

『てぶくろをかいに』

二年A組 大森 海宝

「戸をたたいて待ったら人間が戸を開けてくれる」と母ぎつねが言っていました。子ぎつねが手を出すと、帽子屋のおじさんが人間の手にやらないとびつくりしました。「きつねの手」と言いました。子ぎつねが殺されるとドキドキしました。僕は初めて読む本でした。アニメみたいな感じでびつくりしました。サスペンスドラマを見ているような感じがしました。おどろきました。僕は子ぎつねが殺されたら帽子屋のおじさんが子ぎつねを食べてしまうかもしれないと思いつつこの本を読みました。でも、無事に手袋を買うことができてよかったです。

母ぎつねは人間は怖いと思っていました。でも、帽子屋さんは優しくかったです。僕も優しい人になりたいです。今、人間と動物は仲良くありません。僕は帽子屋さんみたいな人がたくさん増えたらうれしいです。いつか人間と動物が仲直りできる日がきたらいいと思います。そのために僕はこれから動物を優しくあつかっていききたいです。



『たんぼぼ作業所』

二年A組 二宮光彦

僕は『たんぼぼ作業所』という話を読みました。この話は、「たんぼぼ作業所」という、障害を抱えている人が多く働いているところで、主人公が働く話です。

僕はこの話を読んでいて、自分も働き出したら、周りの人を自分がどうにかして助けることも大事だというのが分かりました。

仕事をするのは、どの仕事も楽ではないと思います。僕は説明を聞いてはいますが、しばらくすると、「ここまですでいいんですか?」というのをよく言っていました。今はあまり言わなくなりましたが、やっぱり時々言ってしまうと思います。

この話を読んで、たくさん勉強をしたり、人の話をしっかり聞いて、一度失敗しても「失敗は成功の元」という言葉があるのので、将来、頑張って仕事をしたいと思っています。

私はこの本を読んで、私にとっても大切な本だと思いました。「いのち」という言葉は、この世に生まれて来ることができて、そして、生まれて来てくれてありがとうという思いが込められていると思います。人は「いのち」があるから生きているし、イライラするときもあるんだと思いました。私はお父さんとお母さんのもとに生まれて、本当に良かったと思います。

お母さんとは中学生のときや、高校二年生のときに、いっぱいけんかをしました。でも今は、とても仲良しです。あのときを思い出すと、もうすぐ高校を卒業してしまう私は、あの頃の私は何だったんだろうと思います。だから二十才になったら、親孝行をしたいです。



『このち』

高等部二年 藤原 雅哉

私はこの本を読んで、私にとっても大切な本だと思いました。「いのち」という言葉は、この世に生まれて来ることができて、そして、生まれて来てくれてありがとうという思いが込められていると思います。人は「いのち」があるから生きているし、イライラするときもあるんだと思いました。私はお父さんとお母さんのもとに生まれて、本当に良かったと思います。

お母さんとは中学生のときや、高校二年生のときに、いっぱいけんかをしました。でも今は、とても仲良しです。あのときを思い出すと、もうすぐ高校を卒業してしまう私は、あの頃の私は何だったんだろうと思います。だから二十才になったら、親孝行をしたいです。



本の中に「二億個の中からあなたが選ばれたんだよ」と書いてありました。その言葉にも感動しました。私が母親になったときに、子どもにこの話をしてあげたいです。



読書感想文(中学部)



図書委員会は、男子七名女子七名で活動をしています。今年度は、月に一回図書室で「お話会」を開いたり、クリスマス会などを行ったりしました。「お話会」では、図書委員が本の読み聞かせをしています。

図書委員会の活動紹介



私は、お話会で「はらぺこあおむし」や「十一匹のねこ」などを読んで楽しかったです。みんなが喜んでくれて、うれしかったです。

高三 長谷川 恵未

